

「弁証法」とエクリチュール

——デリダがフッサールから学んだもの——

村田 憲郎

○、はじめに

「むしろわれわれが示すつもりなのは、プラト
ンからヘーゲルに至る最も強力な哲学的伝統を
生氣づけ動機づけている、偉大な弁証法的主題
が、刷新されはしないまでも、少なくとも基礎
づけられ、真正のものとなり、完成することが
できるのは、おもてだつてはフッサールのもと
ではないが、ひとえに彼から出発してのみで
あるということ、これである。」『発生の問題』

七頁

青年期のジャック・デリダがジャン・イポリット
のもとで執筆した『フッサールの哲学における発生
の問題』は、彼自身の35年にわたる躊躇の後、一九

九〇年によく陽の目を見ることになったが、も
しこれが出版されていたとしたら、この著作中のこ
のテーゼは、フッサールの現象学とヘーゲル・マル
クス主義との対話を積極的に押し進めていた当時の
フランスの現象学者たちにとってさえ、挑発的なも
のだったに違いない。

ところで一般に言われているほど、デリダはアン
チ・ヘーゲル主義者ではない。実際のところデリダ
のヘーゲルおよび弁証法に対する執着は、彼の旺盛
な著作活動全般を通じて顕著に現れている。そして
彼はしばしばヘーゲルとの離反を促す現代思想家達
自身の思考の中にもヘーゲルとの類似性を認め、
ヘーゲル主義的・弁証法的思考の強力さとその乗り

越えの困難さ、あるいはむしろ無意味さを喚起させている。

とすれば、彼がフッサールの研究から出発し、しかもヘーゲル以降に「弁証法」を完成させたと述べたのはどういう意義をもつのだろうか。

デリダは周知の通り、エクリチュール一般の問題系を一新した思想家である。彼によれば、ヨーロッパ中心主義が「この上なく独自のかつ強力な自民族中心主義」(『グラマトロジーについて』上十六／一頁)であるゆえんは、アルファベットという表音文字の透明性を、理念的意味の現前に対する有効性として、哲学的に開発し体系化しえたことにある。そしてこのことに最も敏感に気づいていたのがまたもヘーゲルであった(1)。音声は純粹に時間的内面性のうちで機能することができるが、文字ないし映像は空間的外界に関係せざるをえない。それゆえにこそ「事象そのもの」の視覚的現前に対して聴覚的音声は透明であり得るのであり、文字の視覚性・不透明性は記号としては音声に対して二次的な代理物とししか見なされない。

これに関するフッサールの独自性を、デリダは文字を理念的意味の伝承の媒体として不可欠なものとするところにおいていた。

「フッサールは『幾何学の起源』のなかでこう説いています。すなわち、数学的なイデアの対象は書かれた表記を必要とする、そして——この点がフッサールの独創的なところなのですが——イデアの対象がイデアの対象となり、したがって伝統のなかに入り、いわば歴史的になるためには、それは書かれた表記を必要とする、と。」『他者の言語』二一〇／二二二頁

フッサールにおけるこの文字の重要性に対して、結局デリダは『声と現象』においてより根源的な次元で音声の優位性に依拠していることを示すことになるが、それはともかく、デリダがエクリチュールの問題に潜む哲学的問題を深めていったのはフッサールを通じてなのである。ところで、内面性を産出する音声以前に働いている記号の時間化の運動、つまり「原エクリチュール(archi-écriture)」の運動である「差延作用(différance)」に相当する語は、『発生

の問題』では「根源的弁証法(dialectique originare)」と呼ばれている。

この「根源的弁証法」から「差延作用」への移行が問題であるとすれば、あるいは弁証法における記号的契機の意味が問題であるとすれば、『発生の問題』から『声と現象』(および『グラマトロジーについて』)『エクリチュールと差異』への移行期にあたる『幾何学の起源』の序文が重要になる。デリダはフッサールの最晩年の著作の一つであるこれを仏訳して、長い序文を付した。科学一般の基礎づけ論として超越論的現象学を提唱していたフッサールが、初めて歴史の問題に取り組んだ『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(以下『危機』)の一つの註であるこの『幾何学の起源』の読解を通じて、デリダはエクリチュール一般の問題に導かれたのである。

一、「幾何学の起源」と「遡行的問い」

フッサールが『危機』においてヨーロッパの「危

機」と呼んだものは、科学の相対主義に由来するものであった。諸々の科学分野における新発見が科学そのものの確固たる基盤を揺るがしたことによって、人々はその普遍的妥当性を疑い始めた。そもそももうずっと長い間、人々は科学に生活上の重大事の指針を求めることをやめてしまった。これは経験主義的実証主義の帰結である相対主義に由来する。生きる指針を失った現代人達、「この事実学はわれわれの生存の危機にさいして、われわれになにも語ってはくれない」と言う現代人の諦めに対して、哲学者は理性の偉大さを喚起し、「理性にしたがって自由に行動する」ヨーロッパ人の理念を回復しなければならぬ。哲学者は真理の名において、人々に生活上の絶対的当為を指定してやる「人類の公務員」でなければならぬとフッサールは言う。

ここでフッサールはデカルトによる絶対的確定性の領域の発見にもかかわらず、なぜこのような相対主義が生じるにいたったのかを検証する。それはガリレイによる「自然の数学化」によるものであった。「純粹幾何学」を模範とする純粹自然科学は、それ

前には数学的領域に限られていたアプリオリな法則性の領域を自然全体にまで拡大してしまった。しかし法則性というものは「式」によって表現される。

「式」とはそれ自身直観的明証に依拠しなくとも「記号的に」理解し操作しうるものである。こうして人々はアプリオリな法則一般が生まれるゆえんの直観的明証とその場所である「生活世界」を忘れ、世界そのものをも記号的に捉えるようになる。つまりアプリオリなものと直観的なものとの分離が、一方では生の意味に無関係な数学や自然科学などの客観主義的科學を生み、他方では生の意味を解明すると称しながら絶対的妥当性に到達できない歴史主義的相対主義を生むのであり、自然科学と精神科學はともにもこの分離から生じたものだということになる。

ところで以上の歴史的叙述を、フッサール自身は直観的明証をアプリオリな認識の根底におく方法でもって行っている。デリダが『起源』で最も注目したのはこの叙述方法であった。それは「遡行的問い(Rückfrage)」ないしは「ジグザグの歩み」と呼ばれるもので、複数の平面で同時に並行して分析を行う

やり方である。『危機』においては、歴史的現在におけるわれわれの認識と過去の起源との同時分析が要請されている。

「端緒を理解するには、あたえられた学の今日の形態から、その発展へとさかのぼらなければならぬ。しかし端緒を理解することなしには、この発展は意味の発展としてはなにも語ってはくれない。／＼そこでわれわれに残されているのは、「ジグザグに」前に進んだり、後に戻ったりせねばならないことである。この前進と遡行とは、相互に助け合うにちがいない。

一方の側でいくらか明らかになれば、他方の側でもなんらかの解明が得られることになるし、それはそれで、その反対側に光をなげ返すであろう。こうしてわれわれは、……その歴史考察と歴史批判において、絶えず歴史的飛躍をせざるを得ない。この飛躍は、脇道にそれることではなく、必要不可欠なことなのである。すでに述べたように、われわれが、「学の崩壊」をともなっている現代の「崩壊」状況から発した自己

省察という課題を身に引受ようとする場合に
は、それはぜひとも必要なことなのである。」

『危機』一〇四／五九頁（強調引用者）

このような叙述が必要とされるのは、科学一般の
「危機」という事情による。一方で科学一般の歴史の
意味をそれ自身として、現代人の重大事として考え
るためには、現代のわれわれにおける認識から出発
しなければならぬ。経験的な科学史がこの考察を
欠くとき、それは単なる好事家の骨董趣味とかわら
ないものになる。しかし他方で現代人の科学の捉え
方そのものが「危機」状況にあるのならば、科学の
根源的な意味にたちかえって考察しなければならぬ
い。そのことによつて現代の科学観は修正を受け、
さらには過去への問いかけがさらに先鋭化されるだ
ろう。問題の特殊性がこのような方法的必然性を要
請するのである。そしてデリダがフッサールから学
んだものは、まず第一にこの独特の叙述のスタイル
であつた（註）。

この方法はそれ自身、客観主義的自然科学と歴史
主義的精神科学とを同時に克服する威力をもつてい

る。ところでこの自然科学と精神科学との区別はカ
ント主義に由来するものではないだろうか（註）。そ
してヘーゲルこそはそのような区別を止揚した哲学
者ではないだろうか。実際この区別は当時の新カン
ト派の認識だが、フッサールは哲学的活動の当初か
ら、このような区別自体を問題にしていたのだつ
た。

ここで弁証法ないしヘーゲル主義と呼ばれている
ものについて便宜上特徴づけておこう。それにはや
はりカント主義を引き合いに出すのがよい（註）。カ
ントは周知の通り『純粹理性批判』において、数学
や純粹物理学を念頭におきながら、そのようなアプ
リオリな総合判断はいかにして可能かという問題設
定のもとに認識論を打ち立てた。彼によれば認識が
成立するのは、悟性が概念的直観に適應する
ことによつてであるが、その可能性の条件としてア
プリオリに与えられているのが、一方では純粹悟性
概念すなわちカテゴリーであり、他方では純粹直観
すなわち空間と時間である。両者の区別は画然とし
ている。つまりカントにおいては一方でカテゴリー

は形式的、超時間的であり、他方で直観は感性的なもの、つまりは時間内的なもののみにかかわる。この前提から帰結するのが、歴史学は時間内的なものに関わる限りカテゴリーに接近できず、経験的なものにとどまるということ、また概念一般にかかわる方法論的考察は諸カテゴリーのアプリオリ性を自明なものとしなざるをえず、カテゴリーは「プラトンの天空」に浮かんだままとなるということである。

したがってカント主義を乗り越えるためには、①歴史の中での概念の生成を、しかも経験的ではなく超越論的な水準で、つまり認識一般の可能性の条件として示さなければならぬ。このことこそここで弁証法ないしヘーゲル主義と呼んでいるものである。そしてもしそれが可能であれば、もはや②叙述的方法的原則と歴史法則とを区別することは不可能である。したがって方法論的反省はそのまま歴史的运动となる。このような側面をフッサールもまたもっていることを示さなければならぬ。これをデリダは「超越論的歴史」と呼んでいる。

ところで「起源」におけるフッサールの関心事は、まさしく「純粹幾何学」のアプリオリな概念の歴史であった。周知の通りフッサールはカントと異なり、カテゴリー的直観を行うことができる。フッサールにとつてはカテゴリーもまた直観によつて与えられる対象であった。それゆえにフッサールは、カテゴリーがいかにして可能かをも直観に即して記述しえたのである。

それではこのフッサールの「廻行的問い」をデリダとともに見てみよう。

二、カント主義との離反と「超越論的歴史」

カントもまた『純粹理性批判』の序言において、幾何学の発見の歴史的意味に興味を示している。カントもまたフッサールと同様、幾何学の発見を事実として取り扱うことには興味がない。最初の幾何学者が「タレスであろうとほかの何人であろうと」、

「彼（幾何学者）は、自分が形態のうちに見いだしたもの、あるいはこの同じ形態についての

単純な概念の後を追って、いわばその諸特性を見習うのではなく、概念を通じて（作図を通じて）アプリオリに自分がそこにに入れて考えかつ示したものを介し、（自己の対象を）明るみへともたらさねばならないということ、そして、確かに何かをアプリオリに知るためには、自分でその概念にしたがってその中におき入れたものから必然的に生じてきたものしか事象に帰してはならないということを発見したのである。」

『純粹理性批判』第二版序言、XI

したがって、カントの場合はこの発見の歴史的意味は、概念というものがアプリオリであるということ、その概念のうちで操作することによって「確実に何かをアプリオリに知る」ことができ、その非経験的独立性が絶対的であるような領域の無歴史的存在をまさしく「発見した」ということにある。つまり、その発見はデリダもいうように、「幾何学を創造する」というよりは、幾何学を解き放つもの」であり、仮に幾何学の歴史というものが考えられるとしても、それは構成ずみの静的な概念の「操作の歴史で

あつて、創設の歴史ではない」。

これに対してフッサールの場合、その最初の幾何学者が幾何学を「創設した」ということが問題である。彼にとつては、アプリオリな幾何学も、それが歴史上発見される以前にはアプリオリにも存在しなかったのであり、しかもそのこともまたアプリオリなのである。それ自身としての幾何学の全面的不在は幾何学の起源の可能性の条件である。この不在は、前もつてアプリオリな領域に存在するがただ人間によつて発見されていないだけ、ということではない。「幾何学は、その総体的意味が、最初からすでに企てとしてあり、ついでそれが動的に充実を得ていくようなものではあり得なかつた」（『起源』二六三／三六七頁）。あるいはむしろアプリオリな領域というものがそもそも存在しなかつたのである。つまりカントの場合は、幾何学の発見はすでに構成済みの概念を「プラトンの天空」から受け取ることであるのに対して、フッサールの場合は幾何学の発見、つまり歴史上初めて行われたカテゴリーの直観は、アプリオリな領域そのものの能動的産出なので

ある。

ところで、この産出をそれ自身として考察するには、幾何学の誕生を、それ以来現在にいたるまで変わることなく流通しているという、幾何学の妥当性の起源としての限りで考察しなければならぬから、まずは現在も流通している幾何学の妥当性から出発しなければならぬ。幾何学の理念性を対象的な相関者として直観しつつ、その可能性の条件を検討することができるのは、超越論的主観性であつて経験的主観性ではない。経験的・心理学的主観性を設定するのでは、幾何学的理念性をも心的過程の単なる効果に還元してしまい、結局経験的相対主義に陥ることになるだろう。それはまた、前科学的な経験的文化から出発して幾何学の誕生を時系列的に追う歴史記述でもない。科学そのものの普遍妥当性を事実に戻元してしまうこと、これは『厳密学としての哲学』でフッサールが心理主義と歴史主義に共通の誤謬として斥けたものである。アプリオリなもの歴史が事実の歴史に墮落しないためには、「歴史のアプリオリ」を考えなければならぬ。しかし

「歴史のアプリオリ」それ自身が再びアプリオリなもの歴史、その起源に規定されている。それゆえにこそ、あの「ジグザグの歩み」が要請されるのである。

ここでまずフッサールは、幾何学の歴史を伝統一般の一つの事例としての限りで取り扱う。伝統とは「因果的にのみ生じてきたのではない」。伝統はそれなりの内的構造をもち、しかも精神的な活動の新たな成果を内面化しつつ有機的に再統合していくような総体である。偶発時の羅列としての自然的因果関係と手を切ったこのような文化一般の運動の一個別事例である限り、幾何学の歴史もまた、「一切の成果が妥当し続け、すべてが一つの全体をなして、そのつどの現在に全成果が新しい段階の成果によっていわば総前提をなすようになる連続的な総合」（『起源』二六二／三六七頁）である。

ところでこのような伝統一般に対して、科学の伝統の特殊性は、「前提としての成果から新しい成果への生き生きとした前進運動」（『起源』二六三／三六七頁）だということにある。フッサールはこうし

て伝統一般の特性を確定したあとに、科学的伝統のあり方の特権性の解明に移行するわけだが、この「前進運動(Fortbewegung)」という語に注目しなければならぬ。ここに潜んでいるのは、科学の歴史の内部では進歩を進歩として測定できるという可能性である。つまり、科学的言説が科学的である限り、それは言説として永遠に流通するのであり、のちに

主題とするように、科学的命題の一義的な反復可能性が、はじめて進歩を進歩として現れさせるのである。今も昔も同一なものを基準にしてはじめて、単なる伝統一般の変遷ではなく、ある目的への接近として歴史を描くことができる。伝統一般の内部で行われる文化的営為は忘れ去られることもあるし、また過去の営為が理解不可能な不条理として現れることもあれば、もはや取り返せない楽園状態として現れることもある。しかし科学の歴史にはそのようなことはあり得ない。ここでは排他的な諸命題も、妥当性の点でいづれがよりすぐれているかを決定しうるし、さらには無効化した命題でさえ、そのあとに続く有効な命題の前段階として科学の内的歴史上の

意味を持つ。というのも、幾何学および科学一般の歴史においては、「前段階としてより原初的な意味形成が必然的に先行していたのであり、この意味形成は疑いもなく、首尾よい実現の明証のうちではじめて現れたに違いない」(『起源』二六三／三六七頁)のだから。

それゆえ、科学の歴史を通過することによってフッサールは、科学の前段階としての文化、「より原初的な意味形成」(のちに見るように、幾何学の母胎としての「測量技術」のこと)に先駆的意味を付与し、経験的文化一般に介入してその成果を理性の歴史に内面化することができる。科学の歴史は、経験的歴史一般の内部から生じて、生じるや否や逆に歴史一般を基礎づけるのである。フッサールの言う意味での歴史とは、自己の内部から生じて自己を包摂するこのような運動をもっている。このような歴史観は、デリダも言うように、諸事実の混沌とした流れを前に相対主義に陥ってしまう経験的歴史主義と、歴史経過が始めから計画書として「プラトンの天空」にあり、それにしたがって事件が時間軸上に

置かれていくだけの俗流「プラトン主義」とを同時に斥けている。したがってこの歴史はその運動において弁証法的であるにとどまらず、カント主義に由来する対立を乗り越えるその力において弁証法的である(①)。

こうして『幾何学の起源』は、この「尋常でない意味において歴史的」な性格に注意を喚起したあと、単刀直入に起源を問うのではなく、起源において産出された理念の媒体となるものの解明を迂回していく。つまり「ジグザグの歩み」の実践である。ここではじめて、発見者の精神的所産の伝承の媒体として、言語の問題が現れてくる。

三、言語と理念性

ここでもフッサールは、伝統一般と科学の伝統という主題に関して論じたあの弁証法的運動にしたがって記述する。段階に分ければ、

- (a) 幾何学的理念性と言語的理念性一般
- (b) 話し言葉と文字

の二重の運動を経て、幾何学的理念性が伝承可能なものとなるのである。

(a) 一方では、フッサールは幾何学的理念性を、理念性一般の内記述する。この一般性においては、「ピタゴラスの定理も、幾何学の全体も、いかにしばしば、そればかりかいかなる言語で表現されようとも、ただ一度しか存在しない」のは、「Löwe (＝ライオン)」という語がドイツ語においてただ一度しか現れてこない」と同様である。言語はそれ自身「徹底して理念的対象性から築き上げられている。」しかし他方でそうした同一的理念性一般のうちでも、幾何学的理念性は「ライオン」のような語がもつ意義(Bedeutung)の理念性からは区別される。

「幾何学の用語や命題や理論純粋に言語的形象と見なされたがもつ理念性は、幾何学において言表されたものや真理として妥当させられたものの理念的な幾何学的対象、事態などの理念性ではない。……ここで主題とされるのはまさに理念的対象性なのであって、これは言語という概念に従属する理念的対象性とはまったく異なる

のである。」『起源』二六六／三六八頁

骨肉を備えたライオンと「ライオン」という語の意義が違ふように、対象としての幾何学的理念性と数学的言表とは、たとえば「三角形」そのものと「三角形」という語の意義(Bedeutung)とは区別される。「イエナの勝者」と「ウォータールーの敗者」、「等辺三角形」と「等角三角形」は意義は異なるが対象は同じである。対象が様々に表現され、多様な意義を持ちうるのに対し、意義ないし概念の理念的同一性とは、語の反復的使用を貫いているものである。

ところで幾何学的対象の場合、対象それ自身と、括弧に入れられた対象、つまりノエマの意味内容とを分ける必要がないことに注意しよう。骨肉を備えていまにもわたしに襲いかかろうとしているこの眼前のライオンと、百獣の王であり猫科のたてがみをもつ肉食獣であるという「ライオン」一般の本質、現象学的還元をうけてノエマの意味現象となつた「ライオン」の本質とは区別されるのに対し、幾何学的対象の場合は、すでに経験的實在性の面で還元をうけているから、現象の意味は即対象である。

このとき、経験的言語の意義は各言語独特の音声を伴つてしか現れえない点で感性的なものに依存しているし、また感性的意味はそれ自体は経験的なものではないにせよ、経験的なものを範例とする本質直観において把握される限りでやはり経験的なものに依存している。これに対して幾何学的理念性は現実世界のどこにも見出されないから、まったく感性的世界から自由である。かくして、幾何学的理念性があらゆる経験的偶然的な文化から自由であるという確認によつて、幾何学の起源がその規定を受け取る。純粹な理念的対象性は、言語一般の外部においてしか可能ではない。それはそれ自身において絶対的に自律しており、いかなる他のものとの関係にも依存しない。

ところがこの絶対的な自律性は、そのようなものである限りでは、いかなる普遍性も獲得しない。それは他との関係に依存しないがゆえに、他と関係する必要がある。したがつて自身にふさわしい普遍性を自身のほうから獲得することはない。

「われわれの問題はまさに、幾何学において主

題的な理念的対象性に関わっている。そもそも幾何学の理念性は(すべての科学のそれと同じように)、最初の発見者の心の意識空間内の形象であったその本源的な人格内部的起源から、いかにしてその理念的客観性へと至りつくのだろうか。『起源』二六六／三六八頁

したがってフッサールは、いったん全面的に退けた言語一般を再び呼び寄せる。「言語を介してであるということは、前もって見通しがつく。それは言語の中でいわば言語的身体を受け取るのである。」(同上)これは言語的理念性のもつ有限性、感性的世界に拘束されているという事態へと後戻りすることではない。彼は起源に触れつつ有限性の領域へと後退することによって、有限性を解放しようとしているのである。理念は自身の客観性を実現させるためには、実際に発言されなければならない。こうして、ここでもまた文化的なもの一般と科学的なものに關する、あの自己の内部から生じて自己を包摂する運動が認められる。デリダも言うように、「この言語活動への回帰は文化および歴史一般への還帰として、

還元そのものの企画を最終的完成にもたらず」(『起源・序説』一一一／七十頁)のである。

(b)しかし、「それだけでは、その発見者と仲間たちがこのような連携に目覚めていない、あるいはそもそもはや生きていない時代にさえも存続する「理念的諸対象」の現存が欠けている」(『起源』二七二／三七一頁)とフッサールは言う。すでに見たようにフッサールの敵は相対主義一般であるが、彼は最初から事実上の人類共同体内部での普遍性に満足してはいなかった。彼はすでに『論理学研究』において、「人類が存在しないとすれば、真理も存在しない」とする「人類主義(Anthropologismus)」を、「真理が存在しない」という真理が存在する」という自己矛盾であるとして非難している。また『イデーンI』においては、超越論的主観性は人類ではない知的生命体(つまり宇宙人)をも考慮したものであった。このような立場を保証するものは、人類の事実上の絶滅をも越えて真理を伝承する媒体の可能性、つまり「文字に書かれ、記録された言語表現」の可能性である。

「直接間接の人格的話しかけを必要とせず伝達を可能にすること、いわば潜在的になった伝達であることが、文字に書かれ、記録された言語表現の重要な機能である。このことによつて、人類の共同体化もまたある新しい段階へと高められる。」『起源』二七二／三七一頁

ここにおいて、人類という共同体が理念的存在へと高められる。つまり、理念としての人類が現れる条件とは、経験的主観性の事實的総体としての人類が絶滅してもなお現存することができる、文書という媒体なのである。

三、エクリチュールの両義性

——開示と隠蔽——

ここで文字が焦点となるのだが、フッサールはこれを両義的なものとして記述している。デリダがエクリチュールに関して関心を寄せるのは、まさにこの両義性である。

それは一方で今まで見たように、理念としての人

類の共同体の条件である。歴史がそれ自身として現れるのは、文字のもつ恒常的物体性のうちにおいてである。それは経験的主観性の手を離れることによつて、個人の有限な生命を乗り越え、起源においては精神的なものであつた幾何学的理念性が本来感性的事物の属性である不変の存続性を獲得する。したがつてそれは諸々の個別歴史が開示される場として、歴史一般の可能性の条件である。

しかし他方で、経験的主観性の手を放れるということはまた、真理を管理する超越論的主観性の手を放れることでもある。ここから様々な真理の消失の危険が生じる。

(a) 理念性が「感性的身体化」を被るということは、事実上の破損の危険から免れないということである。焚書や図書館の火災の危険。フッサールはこれを心配していないが、そもそも人類消滅後も書物は存続するののかという素朴な問いは、ここでそのまま単に経験的にはとどまらない意味を持つはずである。

(b) 多義性という危機。フッサールが「言語の誘惑」

「連想的形成の自由な戯れ」と呼ぶもの。文字に限らず言語一般がそうなのだが、言葉は比喩的な言い回しや論理を越えた連想を通じて、日常生活の中でもととの意味とは多かれ少なかれ異なる様々な多義性を生み出す。

この多義性はなるほどそれ自身伝承の媒体ではある。故事成語やことわざ、民間伝承や流行語のうちに織り込まれたコンテクストが想起されるのは、まさしく語の多義性が自ら展開することによってである。しかしこのとき多義性が展開されるのも、多義性の根幹にある一義性を軸にしてではないだろうか。伝統一般に対して科学の伝統の特異性は、多義性を放棄することによって、多義性の可能性の条件である一義性を確保しようとすることである。

「ひとは、現実的な蘇生可能性をただ単にのちになつて確かめるばかりでなく、当初の明証的な創設以来すでに、それを蘇生させる能力とこの能力を持続的に保持しているという保証をもつことによつて、この危険に対処する。このことは、言語的表現の一義性を心につけて、当該の

語、命題、命題連関などを綿密細心に確定し、一義的に表現されるべき成果を確保するように配慮することによって行われる。それは個々人の仕事であり、新案者の場合にとどまらず、他者から受け継ぐべきものを受け継いだのちの科学的共同体の一員としての各科学者の場合も、いずれも同じことである。それゆえ、このことは、共通な責任の統一のうちに生きている認識共同体としての、その科学者たちの共同体の内部の科学的伝統の特有なものに属している。」

『起源』二七四／三七二頁

フッサールが一義性に対する科学者の共同責任を喚起するのは、科学的言語の持つ決定的な一義性のみが、歴史一般にただ一つの時間軸を提供するからに他ならない。ここでもやはり個別的な個々の文化内の歴史ではなく、歴史一般の可能性の条件たる超越論的歴史が問題なのである。

(c)しかし科学的一義性を確保するとは、術語体系の精緻化のことではないだろうか。少なくとも科学的言語を記号化する試みのもとの意図は、そう

した一義性の確保にあったのではないだろうか。フッサール自身『危機』の中で、ライブニッツの「普遍学 (mathesis universalis)」を普遍的な代数的思考の最初の試みとしているが、それに対しては中立的で、直接「危機」と呼んではいけない。しかし「文字や結合記号や関係記号 (+、-、= などのような) を、その結合のゲーム規則に従って、すなわち事実上本質的にはカードやチェスのようなゲームと同じような仕方で作る」(『危機』八五/四四頁)という事態は、一義性の要請からのある種の帰結ではないだろうか。直観的明証性からの乖離、「意味の空洞化」という「危機」の本質は、科学者の共同責任によって回避されえない。

このような意味で、文字は起源を隠蔽するものでもある。フッサール自身はこの事態を避けるため、直観的明証は前言語的な次元で常に可能であるとし、概念的平面における諸概念の水平的な相互規定による科学性(=精密科学 exakte Wissenschaft)を、直観的明証の参照によってそのつど新たな意味を概念に与える現象学の科学性(=厳密科学 strenge

Wissenschaft)によって批判的に再検討しようとした。しかしデリダは『声と現象』で明らかにように、直観的明証性に依拠することを拒み、むしろ文字の開示すると同時に隠蔽するものであるという両義性を正面から受け止めようとするようになる。

五、断絶と起源

ところで以上の分析は別個に扱ってもそれぞれが独立の価値を持ちうるものだが、「遡行的問い」ないし「ジグザグの歩み」の特異性は、分析の成果が自身に適応されることによって叙述自身が歴史の運動そのものと同一になることにある。ところでこの現象学的な遡行は、まさに自己を開示すると同時に隠蔽するというこの文字の二重の機能によって、それ自身歴史の目的論的前進の実践となる。つまり文字の二義性は遡行が即前進であるという優れて弁証法的な運動の鍵なのである。最後にこのことを示してみよう。

フッサールは以上のように言語という媒質の分析

を通じて「歴史のアプリオリ」を一般的に開示したのち、幾何学そのものの起源へと帰っていく。あの迂回から言語の考察を経て、いまようやく幾何学の起源の具体的な意味が考察される。この起源の意味への問いは、「いかなる条件のもとで幾何学は誕生しえたか」という形に定式化され得るだろう。フッサールはこの条件を幾つか列挙している。

ここで幾何学の誕生の諸条件として挙げられるのは、(1)前精密な事物、(2)事物のうちでも前文化的な物体、(3)その物体が空間時間的形態と、素材的性質とをもっていたということ、(4)技術的实践における形態の斬新的改良、である。ここで重要なものは、(4)の技術的实践における形態の斬新的改良である。「x^oに、必要に迫られる実生活において、形態の中である種の特種化が現れ、技術的实践がいつもすでにある種の漸進的方向にそって、そのつど、より好ましい形態の製作とその改良を目指した。」(『起源』二九九／三八八頁)

この技術的实践とは「測量技術(Mechanik)」のことである。この実践とは現実の測量道具の発達と想

像における形態の修正、変更との相互作用によって進歩する。進歩一般を可能にするのは想像力なのである。

ところで幾何学的理念性は、この「測量技術」が操作する感性的抽象と想像変更によって獲得される「理念性」とは根本的に異質なものである。想像はフッサールの場合、知覚と同じく感性である。したがって想像変更において獲得される「ある意味で「理念的」な自由な可能態」は、「測量術」がもつばらそれしか操作できないものであり、幾何学の基底ではあるが、幾何学そのものには属さない。それゆえこの測量技術の疑似理念性から幾何学的な純粹な理念が生まれたとすれば、ここには絶対的な断絶ないし跳躍があるだろう。この「基底(Fundament:fondement)」は、徹頭徹尾感性的な存在であり、感性的なものから理念的なものが発生することはない。したがって「基底づけ(Fundierung:fondation)」の作用とは、感性的なものには還元不可能な「純粹な思考」でしかあり得ないだろう。

「この完全にするという実践から出発して、「繰り返し繰り返し返し返し」というかたちで、考えうる限りの完全化の地平へと自由に突き進むことによつて、いたるところに極限形態が予示され、決して到達されることのない不変の極としてのそれへ向かつて、その都度の完全化の系列がのびていくのである。この理念的な形態に関心をもち、それを規定し、すでに規定されたものから新たな形態を構成することに一貫して従事するとき、われわれは「幾何学者」なのである……。……われわれはいまや、もっぱら純粹な極限形態の領域にとどまる「純粹思考」という理念的な実践をもつことになる。』『危機』五三—二三頁

このような「極限形態」の産出が、すべての科学実践が営まれる理念的空間を初めて開拓する。これ以降、この空間の内部ではあらゆる対象が無限の同一的反复可能性を保持するだろうし、またこの理念性は感性的世界からは完全に独立しているのだから、感性的直観に回付しない演繹的公理系一般を可

能にする。

ところでこの幾何学の起源における絶対的断絶の絶対性とは、絶対的に自立的で普遍妥当な理念性の誕生という意味であり、それ自身の特権性は疑いようがないが、それにしてもこのように起源を断絶に還元することは、結局一つの事件を絶対化することになりはしないだろうか。理性の歴史は全くの混沌から突然始まったということにならないだろうか。このような違和感は当然予想されよう。ここでデリダは、フツサールの起源への問いを、このような断絶の解体として読もうとしている。というのもフツサールが実践しているような、幾何学がいかんにして誕生しえたかを考えることは、幾何学が誕生したという事実そのものの一回性ではなく、幾何学が誕生しうる可能性の条件に注目することなのだから。事実が問題ではないということも最初から確認されているのだから、その方向性を徹底することによつて、断絶の特権性を中和することもできるはずである。

ここでまず、幾何学が客観主義的科学一般の範例

であるということを考えてみよう。フツサーールが幾何学の起源としての古代ギリシャを特権化しているのは、『幾何学の起源』および『ヨーロッパの人間性の危機と哲学』においてである。しかし他方では『危機』本文において、理性の起源はルネサンスであるとされている。

「この最初の偉大な発見の歩みとは、すでに客観的な即自態と考えられている自然の有限性を超克すること、明白な無限性をもつにも関わらず、有限性にとどまっているものを超克することです。無限性はまず、大きさ、量、数、形態、度、極、平面などの理念化という形で発見されます。自然、空間、時間は、無限的なものへと理念的に延長可能となり、無限に分割が可能になります。測量術から数学が、日常的な道具いじりから数学的な力学等々が、生まれてきます。今や、それら素朴なものからはつきりある仮説をつくらなくとも、直観的な自然や世界は、数学的世界へと、つまり、数学的自然科学の世界へと変化していきます。古代はこの模範

を示しました。そして、古代の数学でもって同時に無限な課題の最初の発見がなされました。このことは、すべての後世にとって科学の導きの星になります。」「ヨーロッパの人間性の危機と哲学」六九／三四〇頁

「確かに古代人たちも、プラトンのイデア論に導かれて、経験的な数や量、経験的な空間形象、すなわち点とか線とか平面とか立体とかをすでに理念化してはいた。それとともに、幾何学の命題や証明を、理念幾何学的な命題や証明に変えてもいた。それだけではなく、ユークリッド幾何学とともに、広く高く掲げられた理念的な目標を目指す体系的統一をもった演繹的理論という、きわめて感銘の深い理念が生じてもいた。この理論は、「公理的な」基礎概念と原理とに基礎をおき、必然的な推論によって進行する、純粋な合理性に基づく全体なのである。すなわち、まったく無条件的な、直接間接に明証的な真理の全体であり、その無条件の真理性を洞察しうる全体なのである。しかしながら、

ユークリッド幾何学や古代数学一般は、ただ有限な課題、有限に完結しているアプリオリだけしか知らない。……古代が到達したのはここまでであって、無限の可能性を把握するまでにはいたらなかった。』『危機』四六／十八頁

つまり奇妙なことに、一方では、古代ギリシヤにおける幾何学の誕生は「無限の課題」の発見とされているが、他方では、古代の幾何学の誕生は「有限の課題」、「有限に完結しているアプリオリ」と言われている。

ここでデリダはこのような齟齬に関して一つの解釈を提案している。すなわち、近代の初頭、つまりルネサンスにおける、ガリレイによる自然の数学化は、幾何学という超感性的な完結した体系の内部から生じた。古代の幾何学の有限性とは、完結的体系という意味での有限性であり、ここでは自然全体への適応はいまだ考えられてはいなかったし、その有限性の内部で無限に概念を操作し、無限の幾何学的可能性を追究し、公理体系を無限に精緻化していくことが関心事だったのである。しかしルネサンス

における「自然の数学化」では、その無限の操作の解放、つまりそのような幾何学の完結的体系を手引きとしておこなわれる「経験的測定」が、幾何学的アプリオリから派生した「普遍的アプリオリ」によって達成された。つまり有限性からの解放は、一方で完結的体系に外部を開くあらゆる無限化ではあったが、しかしそれもアプリオリの有限な体系を導きとしてしか行われなかったのである。

ところで完結的体系を有限性として名指すことは、その完結性の外部にまた無限の領野が開かれていない限りは不可能だから、古代ギリシヤの幾何学の有限性はルネサンスに新たに開示された無限性と同時に認識されたことになる。そのとき数学的アプリオリそのものであった幾何学的アプリオリは、数学的アプリオリ一般のうちで特殊なものにすぎなくなり、古代の幾何学はそのとき無限の全体であることをやめる。古代の幾何学の特権性は、科学一般の内部では忘れられていくのである。

こうして見ると、あの自己の内部から生じて自己を包摂する歴史の弁証法的運動は、あらゆる超出に

よって無限に自らを解放していく運動でありながら、この新たな超出がそれに先立つもう一つの超出の再現という性格をもつのである。この水準ではすでに、歴史における現象学的な「遡行的問い」は、起源への遡及であると同時に、歴史的發展の実践でもある。というのも、起源の再現は歴史の前進運動そのものなのだから。

「哲学すなわち学問とは、人間性そのものに「生得的」で普遍的な理性が開示されていく歴史的運動だと言つてよいだろう。」（『危機』三七／一三頁）「言説の方法としての現象学は」、とここでデリダにしたがつて言うことができるが、「自らの全史的歴史性を意識している思考そのものである。」（『起源・序説』二四六／一四六頁）したがってここにおいて、方法論的原理が歴史の原理そのものとなるのである②。

しかし他方で、新たな超出はもとの超出つまり起源を浮上させ、根こぎにし、凝固させる運動でもあった。とすれば、古代の幾何学の起源がルネサンスにおいてそうだったように、起源は自己をあらわ

にするまさにその瞬間に、自己を隠す。したがって、フッサールの問いを徹底化して、幾何学の母胎である「測量技術」の隠された起源について問うことができる。なるほど「測量技術」は経験的文化に属しており、感性的な疑似理念性である想像変更の有限な能力しかもたないだろう。そのかぎりでは、この問いは理念的なものがそのものである限りでの起源にかかわる「理性の普遍的目的論」に属してはいない。しかしこの有限性もまた、幾何学の誕生、無限な理念性そのものの解放においてははじめて有限性として現れたと言ふこともできる。そう考えると、「測量技術」は幾何学の先駆である限りで、「遡行的問い」の主題になり得るはずである。

にもかかわらずフッサールがそうしないのは、やはり理念の現前をテロスとする「ロゴス中心主義」的な言語観にとらわれているからである。「測量技術」の想像変更の疑似理念性は、理念性一般の先駆であるにせよ、やはり依然として理念そのものではない。したがってこれの手前でフッサールの「遡行的問い」は歩みをとめてしまう。デリダがフッサール

ルと袂を分かつのはこの点に關してである。

結論

本論が示しえたことを整理してみよう。

- ・フツサルは『幾何学の起源』において、アプリオリなものが歴史を通じていかにして構成されるかを示している点で、カント流のアプリオリなカテゴリーの存在論的地位の不可解さを解消している。
 - ・その際さらに歴史一般の可能性の条件を明確化した点で、ヘーゲルに類比しうる射程を持っている。
 - ・しかしフツサールの特色は、歴史一般の可能性の条件を言語に、とりわけ書く行為および書かれた文字、エクリチュールのうちに見ていることである。
 - ・したがって開示すると同時に隠蔽するというエクリチュールの機能⁽⁵⁾が、遡行即ち前進であるという優れてヘーゲル的な運動の本質である。
- デリダは、ヘーゲルの弁証法を独自に読み変えるうえで、フツサールの以上の特色を援用したのである。

註

(1) 『声と現象』一四六／八五頁。例えば『精神現象学』の精神章B I a、ズールカンブ版三百七十六頁等々。

(2) あるインタビュで彼が「現象学的訓練やその方法的な厳密さを放棄したことは一度もありません」(『現象学のデフォルマシオン』一九四頁)と言うとき、念頭に置かれているのはこれである。

(3) こうして生じてくる限りでは、歴史主義的精神科学と客観主義的自然科学との対立は、サルトル流の生成の哲学と、時間を捨象した共時性に依拠する構造主義との対立に類似していることが分かる。デリダが『エクリチュールと差異』において考慮していた生成の思惟と構造の思惟との乖離という状況もまた、フツサルにとつてと同様、遠くカントに由来するものだとと言える。

(4) これはデリダの整理を踏まえた便宜的なものなので、例えばヘーゲルないしカントは実際はそうではない側面ももつという批判は、この論文全体の主張と矛盾なく両立する。

(5) ちなみにここにハイデガーとの対決を読みとることも可能である。ハイデガーの「現存在(Dasein)」は問うものとしてのわれわれであると同時に、解釈されるべきもの、すなわち一つのテクストである。現存在の「現(Da)」は真理が開示される場なのである。しかしまた真理は言表(aussagen)され、単なる言表という形式をうけることによって、隠蔽されることもありうる。他方デリダにあつては、エクリチュールないしテクストは真理を「開示するものでもあれば隠蔽するものでもありうる *entdeckend oder verdeckend sein kann*」(『存在と時間』四四節二二六頁)のではなく、開示しかつ同時に隠蔽するものなのである。

文献註

ページ数は一般に邦訳／原典としたが、カント、ヘーゲル、ハイデガーは原典のみとした。またその他原典が入手困難なものは邦訳のみ。フッサールに關しては原典はフッセリアーナ。その他は以下の通り。

『危機』(『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』) 細谷恒夫・木田元訳、中公文庫、一九九五年
『起源』(『幾何学の起源』) 田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、一九九二年

『ヨーロッパ的人間性の危機と哲学』清水多吉・鈴木修一訳(『30年代の危機と哲学』所収)、イザラ書房、一九七六年

『発生の問題』(『フッサールの哲学における発生の問題』) *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*. PUF, 1990

『起源・序説』(『幾何学の起源』) 田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、一九九二年 / *L'origine de la géométrie*. E. Husserl. traduction et introduction par Jacques Derrida. PUF, 1962

『声と現象』(『声と現象 フッサール現象学におけ

る記号の問題への序論）高橋允昭訳、理想社、一九七〇年／*La voix et le phénomène, introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl.* PUF, 1967

『グラマトロジー』（「根元の彼方に」グラマトロジーについて）足立和浩訳、現代思想社、一九七二年／*De la grammatologie.* Minuit, 1967

『他者の言語』（「他者の言語」デリダの日本公演）高橋允昭編訳、法政大学出版局、一九八九年

『現象学のデフォルマション』リチャード・カーニー編、毬藻充・松葉洋一・庭田茂吉訳、一九八八年

（むらた のりお 一橋大学）